

海外提携 研究機関訪問報告

漢陽大学校東アジア文化研究所・ 仁川大学校中国学術院表敬訪問

小熊 誠（センター長）

2019年2月26日から3月1日にかけて、韓国の2校の協定機関に表敬訪問と今後の交流の意見交換に行ってきた。従来、非文字資料研究センター（以下、センターと称す）の海外協定校との交流は、大学院生や若手研究員の招聘と派遣が中心であった。センターの研究員は、それぞれの研究班での研究が主になって、研究班相互の研究員が合同で協定機関との交流を行うことは、少なかった。センター成立から10年が過ぎ、メンバーの入れ替わりもあり、また非文字資料研究ということで研究員共同の活動を行うことも必要であろうということで、研究員に呼びかけて今回の訪問ということになった。今回の参加者は、前センター長内田青蔵先生をはじめ

ジア生活絵引―朝鮮風俗画編』を入手したということから、絵引のその後の研究状況をこちらから説明した。鄭所長は、近世の韓国文化を研究しており、最近は国立中央博物館に所蔵されている『太平城市図』から、そこに描かれている人々やモノなどを分析しているということであった。絵引の各事項に対する説明は、短すぎるので、もう少し細かく書くべきではないかという意見があった。それに対して、絵引はあくまでも辞書なので、各項目についてそれほど細かくは書いていないことを説明した。

このような交流が行われて、共通の研究事項のアイデアがその場で話された。つまり、絵画をどのように研



写真1 漢陽大学校東アジア文化研究所にて



写真2 仁川大学校中国学術院にて

め、副センター長の熊谷謙介先生、運営委員の孫安石先生と後田多敦先生、そして事務室の成田紅音さんと小熊の6名であった。

漢陽大学校東アジア文化研究所（写真1）とは、2011年に当時の田上繁センター長と呉秀卿教授の間で学術協定が締結されている。今回は、鄭所長を中心に李京億先生が通訳をしてくださり、また2016年度に招聘でセンターにきた任仁宰氏も加わった。鄭所長は、自分の研究と深く関連するので、かつてセンターの『東ア

究していくかについて、近世日本は現在も継続して行われているし、中国の絵引の班も活動している。さらにヨーロッパの絵画を表象的に研究している班もあるので、将来鄭所長に参加していただき、これらの絵画を対象とするそれぞれの班とシンポジウムが組めないかという計画の話で盛り上がった。将来、是非実現したいものである。

翌日、仁川大学校（写真2）を訪問した。キャンパスに着くと、中国学術院華僑文化研究所の李正熙教授に、

まずキャンパス案内をしていただいた。そして、中国学院院に向かい、李甲泳院長および華僑文化研究所の張禎娥所長、金支煥教授などと挨拶を交わした。張所長は、「韓国と中国の関係研究はまだ十分進んでいるとは言えない。現在、華僑の資料を集めて研究を進めている。非文字資料研究センターとも、写真展とシンポジウムなどを行っているので、今後とも研究交流を行っていききたい」という話し合いが行われた。その後、華僑文化研究所の図書館を見学した。仁川その他の華僑関係の資料を集中的に収集しており、また『仁川華僑協会所蔵資料』を華僑協会と協力してまとめて刊行している。その他、韓国の華僑だけでなく、中国の宗族や商業慣行などの調査も行い、多くの研究成果の出版が行われている。華僑文化研究所と本研究センターにおける今後の研究交流に大いに期待が持てる感覚をもった訪問であった。

午後からは、花島真図書館を訪問した。この図書館には、仁川における戦前からの華僑の写真や葉書などの資料が多く収集され、その一部が展示されている。仁川市立の図書館だと思われるが、貴重な華僑関係資料が収集されている。

その後に、仁川の華僑街周辺にあるいくつかの展示館を見学した。まず、仁川開港博物館に行った。その建物は、戦前の日本第一銀行仁川支店だった建物で、戦後韓国銀行仁川支店となり、その後いくつかの建物に転用され、2010年に仁川開港博物館の前身である仁川最初史博物館として開館した。仁川開港当時の写真のほか、京仁線機関車の模型やさまざまな当時の文物が展示されている。次に、仁川開港場近代建築展示館を見学した。この建物は、1903年に日本第十八銀行仁川支店として

建てられた建築で、当時上海で取引されていたイギリスの綿織物を仁川に輸入する仲介業が盛んであり、日本の開港場であった長崎の第十八銀行が仁川にも進出していた。仁川は、1883年に開港し、当時の仁川の写真や現存する仁川の近代建築の写真などを展示している。次に訪問した中区生活史展示館は、第1館が韓国で初めての西洋式ホテルである大仏ホテルの歴史を展示し、第2館は1960から1970年代の中区の生活を展示している。さらに、炸醬面博物館に行き、19世紀に中国山東から労働者としてやってきた華僑が食べた炸醬面の歴史の展示を見学した。最後に、仁川華僑協会（写真3）に行き、会長の孫徳俊氏にお会いして、仁川華僑の歴史などを伺った。華僑会館には華僑の写真や書、その他の文物の展示があった。

三日目は、江華島訪問であった。

日韓近代史、韓国近代建築、近代における江華島とフランスなど、参加者の研究テーマと関連して、江華島を訪問した。江華島では、仁荷大学の金龍河先生および現地研究者の金氏に依頼し、見学地でご説明いただいた。また、漢陽大学校建築学部富井正憲先生も参加していただいた。

まず、江華島の東に隣接する喬桐島に行った。そこは、たいへん小さな島であるが、近代以前に儒教を教えた学校であった喬桐郷校に行った。山の斜面に山を背に、南向きに建物が建てられている。正門は、屋根が三部分に分けられており、左右に比べると中央は一段高く組み合わさっていて、日本ではあまり見ることができない構造になっている。入り口もそれぞれの屋根の下に三つの戸があり、中央には上が赤で下が青の太極が描かれている。



写真3 仁川華僑協会にて



写真4 天主聖殿にて



中に入ると明倫堂があり、真ん中の戸は緑色、左右の壁は黄色、柱は赤で塗られているまさに韓国的な色彩の建物である。屋根も左右の瓦が曲線を描いて上に反っている。近代の学校ができる前は、両班の息子たちがここで儒教を学んだ。明倫堂の左右に建物があり、ここで生徒たちが寝泊まりした。向かって左側が低学年、右側が高学年の寄宿舎であり、それぞれに暖房のオンドルがあり、その煙突が石組みに白い漆喰で太く造られていて、荘厳な建造に見えた。その裏の一段高い場所に、大成殿が位置している。緑色を中心に黄色と赤い柱で彩られ、荘厳な木造建築である。

次に、江華島に戻り、江華平和展望台から、川を挟んで北朝鮮を眺めた。あいにくスモッグがかかって、はっきりと対岸を見ることはできなかったが、歴史の重みを感じる場所であった。

聖公会江華聖堂は、小高い山の上に建っている。1900年にイギリスの宣教師によって建てられた教会で、朝鮮戦争でも破壊されずに今でも伝統的な木造の教会が保存されている。天主聖殿（写真4）と書かれた教会は、間口四間ほどの建物であり、外壁には、緑色を中心に彩色がされている。内部は濃茶で柱などが塗られ、真ん中が高い屋根、左右が低い屋根となっており、三部構造で造られ、木造の落ち着いた雰囲気教会である。韓国の伝統的な木造建築である。

次に、日本統治時代の1934年に建てられた朝陽紡績工場跡に行った。そこには、戦前の工場の建物がいくつも残され、中央の工場は広い喫茶店になっている。その他の建物には、現代美術が展示されており、元のままの建物を利用した観光施設になっている。韓国では3月



写真5 江華島徳津鎮南障砲台

に新学期が始まるので、その直前ということで、多くの観光客が集まっていた。

江華島の最後に、島の東南部にある近代の国防要塞地である広城堡と草芝鎮に行った。川のような塩河を隔てて大陸側の金浦と向かい合うこの場所には、いくつもの砲台（写真5）が設置されている。1875年、日本軍艦雲揚が草芝鎮を通過しようとした際に朝鮮軍の砲台から砲撃され、砲撃戦になった。これを江華島事件というが、これを契機に朝鮮が開国に向かっていったと言われている。そこを歩くと、近代の国と国による緊張が思い知れる。江華島（写真6）を歩くと、近代の朝鮮と日本の関係が見えてくる。歴史民俗学科が成立したら、学生をここに連れて来て、近代を身をもって知ってほしいと話し合った。



写真6 江華島草芝鎮にて

今回の韓国協定校訪問は、本センターにおける複数の研究班メンバーが一緒に行動した。このような活動は、従来多くなかったが、それぞれの研究意識の交流があって、それを総合して協定校だけでなく、参加者相互の交流にもつながった。センターが協力して展開していく上でも有意義な訪問であったと思われる。今後、このような海外協定校訪問を継続していきたい。